

デュッセルドルフ日本人学校と日本語補習校との合同授業研修会

前デュッセルドルフ日本人学校教諭

山口県周南市立夜市小学校教諭 藤本 浩行

キーワード：補習校支援、授業研究、短歌と俳句、プラタナスの木

赴任校の概要 2023年10月1日 現在

学校名：日本語：デュッセルドルフ日本人学校

学校名：現地表記：Japanische Internationale Schule. e. V. in Düsseldorf

児童生徒数 小学部348人、中学部89人 合計437人

補習校 小学部195人、中学部48人 合計243人

1. はじめに

在外教育施設に勤務する教員には、1年に1回の補習校との授業を通じた研修会があると聞いていた。「補習校とは、どんな学校なのか」と赴任前から楽しみにしていたことである。赴任1年目は、新型コロナウイルス感染防止で実施されなかったが、2年目は教務主任がボン補習校などの近隣の日本語補習校との研修会の日程を調整し、デュッセルドルフ日本人学校の教員が手分けをして合同研修を行った。

私は、校舎を同じにするデュッセルドルフ日本語補習校で、しかも担任をしている4年生と同じ学年の教員と研修することになった。両校共に2組編成である。以下、デュッセルドルフ日本人学校は本校、デュッセルドルフ日本語補習校は補習校と述べていく。

本校は、1971年創立でバブル期前は児童生徒数が1000人に迫るマンモス校であったが、減少傾向にあり目下小学部中学部合わせて約400人である。逆に補習校の児童生徒数は増加傾向にあり、約200人であり、毎週土曜日の午後から4校時の国語の授業を行っている。校舎を共有している関係上、運動会や学習発表会の行事を同じにしている。本稿では、令和4年の合同研修会について述べることにする。

2. 合同研修会に向けての取り組み

(1) 事前にメールでの調整

12月3日(土)の合同研修会に向けて、メールで当日の研修内容を調整していった。その結果、私が補習校のそれぞれの学級で飛び入り授業を行い、続いて私が補習校のそれぞれの学級の授業を参観し、放課後に授業の振り返りに基づいて研修会を行うという大まかな流れとなった。

次に、「どの単元で授業を行うのか」という具体的な学習内容を詰めていった。補習校の教員からの要望では、私に「短歌・俳句に親しもう(二)」の授業公開し、補習校の両教諭の「プラタナスの木」の授業参観をしてほしいという連絡があり、準備に取り掛かった。

補習校は本校と同じ国語の教科書(東京書籍)を使って、土曜日の午後4単位時間、1コマ45分間である。本校では週当たり国語が7単位時間である。補習校では同じ教科書を約8割の時間で指導する必要があるので、まさに1単位時間が勝負ということである。私に、「短歌と俳句」の公開授業を依頼したのは、配当時間が1単位時間で完結するという理由である。

(2) 本校での「短歌・俳句に親しもう(二)」の実践で工夫したこと

①進捗予定を変更する

合同研修会に向けて、本学級の国語科の進度予定を変更すればよいことに気付いた。単元を差し替えることに、事前に「短歌・俳句に親しもう (二)」と「プラタナスの木」の両方の授業を実施することができ、実践した反省を生かすことができる大きな強みである。

②本校の公開授業で取り組む

本校では、学期に「1人1授業以上」という授業公開がある。私は、この機会を利用して指導案を書いて「短歌・俳句に親しもう (二)」の授業を公開することにした。授業を参観してもらい、本校の教員の意見を生かして、合同研修会に臨むことができると考えたからである。授業参観したK教諭から、「めあてを確認し、それに番号を付けることが新鮮でした。今までもそのような考えがなかった。授業づくりをするときに、めあてとふりかえりの連動、学習活動の連動を意識しているので、よかった」という意見をいただいた。

③俳句作りに取り組む

教科書会社の指導例では、1単位時間で「短歌・俳句に親しもう (二)」を音読して鑑賞して終わりになっている。しかし、私は、授業の後半で俳句作りに取り組む授業を仕組んだ。これは、上巻の教科書では「俳句」の単元があり、俳句作りを毎月取り組んでいたからである。加えて、「海外子女文芸作品コンクール」で、学級で俳句作りを挑戦していたからである。Hくんは「かばやきにおかわりまちのすいはんき」「お正月すきやき味の焼き豆腐」「新学期楽しくかくにん時間割」という3首を応募して、入選した。

④俳句講座をオンラインで受講する

デュッセルドルフには、日本人が多いので日本クラブがあり、様々な行事を企画運営されている。奇遇にも11月19日(土)に愛媛大学の青木亮人氏による「教養としての俳句 俳句の詠み方、感じ方」がオンラインであった。私は受講し、「些細な日常生活を小さく詠むこと」「日常の再発見につながること」などを学んだ。加えて、本校の図書館には、児童用の俳句の作り方の本を借りて教材研究を行った。

(3) 本校での「プラタナスの木」の授業で工夫したこと

①事前に進度予定を変更し、本校で授業を公開

これも、「短歌・俳句に親しもう (二)」同様に、本校の教職員へ「公開授業のお知らせ票」を書いて、授業を公開した。本校の隣のS教諭の学級では教科書通りの進度で国語の授業を進めているので、授業後の情報を聞くことができるというメリットがあった。授業公開では、3・4年生の全員が全員参観してもらったことで、「物語文をどのように読ませるか」というテーマで研修を行うことができた。後日、3年のM教諭は国語科「三年とうげ」の授業公開をしてくださったので、物語文指導の研修を深めることにつながった。

②物語全体を読んでサブタイトルをつける

「プラタナスの木」の物語文全体を読んで、サブタイトルを付けるという授業を構想した。「プラタナスの木」の題にサブタイトルをつけることを考え、話し合う活動をとおして、物語を読む楽しさを感じることができる。本単元は、「プラタナスの木」を教材として登場人物の気持ちや変化をとらえる力を育成し、読み取ったことを友達と意見交換することにより物語を読む楽しさを味合わせるものである。

物語文では、範読後に一人ひとりの学習をしてみたいことをもとに、単元計画を立て、作者の他の作品や似たような物語文を読む読書活動と関連をもって指導してきた。物語を叙述に即して、1人で読み取ったり想像したりしたことを、友達との意見交換することにより、さらに物語文の読み取りを深めたり友達の考え方を深めるものである。班での話し合いを通じて、根拠となる叙述に着目し、自分の考えをもとに話をすること、聞いている人は、じっくりと最後まで相手の考えの意見を聞くことを大切にすること。

3・4年隣学年のキーワード『うなずく』『目で聞く』『かしげる』が、具体的な授業場面で出ているのか参観していただきたい」という授業参観の視点を提示していったので効果的であった。

3. 研修会 12月3日 合同研修会の実際

(1) 1、2組の「短歌・俳句に親しもう(二)」の飛び込み授業

運動会では、本校の子どもたちと徒競走をしたり、「花笠音頭」を踊ったりした子どもたちの前で、補習校の1、2組、それぞれでの学級で授業を行った。本校で実践したことや事前のメールでの子どもたちの情報を生かして、授業づくりを行った。いつものように黒板に日にちを書くとき、ちょうど12月に入ったばかりであるので「師走」ということを指導した。これは、使用している東京書籍の教科書には「言葉による季節感」を学習するものがある。これを日々の授業で生かしてほしいものである。

本時の目標を「文語調の響きや五七調の調子に関心をもち、リズムに気を付けて情景を思い浮かべながら音読して、自らも俳句を作り、班や学級で発表会を行い互いの俳句のよさを認め合うことができる」とした。準備物を「掲示物(教科書の短歌や俳句)、情景の写真、デジタル教科書、A4判の用紙(各自が俳句作りするもの)」とした。

第1の学習活動では、本時の課題をつかませるために、「短歌、俳句」について、知っていることを発表させた。次に、「短歌・俳句を音読して、情景を考え、作ってみよう」という本時のめあてを提示した。本時の学習活動がわかるように、1、2、3のカードを貼り、本時は、「ホップ」「ステップ」「ジャンプ」のめあてであり、俳句を作ることを伝えた。

第2の学習活動では、情景を想像した写真は、どの短歌や俳句であるか考えさせた。五音、七音ごとに色を変えた短冊に書き、提示するごとに何度も音読させて、短歌や俳句から思い浮かぶ情景を思い浮かべさせた。

写真をテレビに映し出したり、印刷したものを提示したりした。「隠れている言葉は何かを考えながら、短歌や俳句を音読してみよう」と問い、文語、五七調のリズムに目を向けさせていった。

「写真は、どの短歌や俳句と関係があるものだろうか」と問い、情景に目を向けさせる。指名した子どもに1つずつ写真を選ばせ、選んだ理由を発表させた。ペア、班で話し合っ、考えさせていった。

「ペア、班の中で話し合い、根拠をもって理由を考え、発表しようとしているか」の観点で、観察したり、発表させたりしたものを観察していった。デジタル教科書を活用して、視覚化して短歌、俳句の情景をイメージさせた。

第3の学習活動で、「情景が浮かぶような俳句(五七五)を作ってみよう」と問いかけた。海外子女文芸コンクールの作品を紹介したり、ウェビングをもとにして発想を広げていたりしてアドバイスを行っていった。「班の中で、友達作品を鑑賞し、プラス面のアドバイスを加えながら、俳句(五七五)を作っているか」という視点で、支援していった。早くできた子どもには、情景を絵で描かせ、色鉛筆で着色させたりした。

「友達作品の発表をして、よさを伝えましょう」と言い、それぞれの作品のよさを認め合う雰囲気をつくっていった。教室には、本校の子どもたちの作った作品を掲示しておいたので、参考になったようである。

補習校の子どもたちは、俳句作りまでは難しいかと思ったが、どの子どもも意欲的に取り組んで楽しそうであった。「もっと、やりたい」という発言が多く、子どもたちから支持された授業であった。

最後に、「俳句や短歌を詠んだり、作ったりして日本文化にふれていきましょう」と話をして、句作りを行うことにより季節感を味わい、言語感覚を豊かにしていくことや、友達作品から伝わるイメージを読み取り伝えていくことのよさについて話をして終わった。

外にも出よ振るるばかりに春の月	桐一葉白当たりながら落ちにけり	柿くへ(え)ば鐘が鳴るなり法隆寺	ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲	金色のちひ(い)さき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に	晴れし空仰げばいつも
中村 汀女	高浜 虚子	正岡 子規	佐々木 信綱	与謝野 晶子	※五音七音は短冊で色を変えている
				石川 啄木	※□は空白にして提示
				吹きてあそびき	
				□笛を吹きたくなりて	

【資料1】短歌・俳句の教科書教材

(2) 補習校「プラタナスの木」の授業参観

補習校2組のS教諭の授業は、「プラタナスの木」の単元の導入の授業を参観することができた。子どもたちに、1枚の葉っぱを見せて、「これが、プラタナスの葉」であることを告げていた。学校の近くのライン川添いの歩道では、プラタナスの並木道がある。子どもたちが通る歩道にもプラタナスの木があることを興味付けていた。授業では、読み取ったことをもとに「プラタナス公園の絵を描こう」というものであった。叙述に即して考えて絵に描き、みんなで話し合っていく面白い視点で、授業づくりをされていた。

また、1組のY教諭は、「プラタナスの木」の2時間目の授業であった。「梅雨」という言葉が話題になり、国語辞典を使って意味調べをさせていた。梅雨のないドイツで生活している子どもたちにとって、具体例を挙げながらていねいに説明していた。言語力を身につけるには、国語辞典を引く力を養うことは不可欠なものである。また、教科書対応のワークを効果的に使って、読解力を身につけることをねらった授業であった。

4. 合同研修会の成果と課題

(1) この単元で身につけさせたい国語の力は何かを明確にする

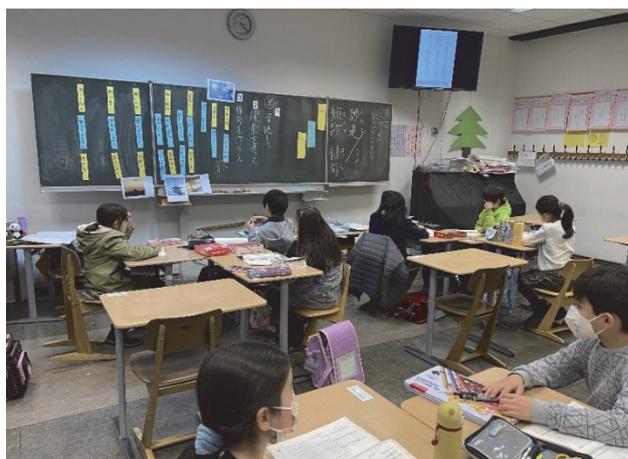
子どもの実態は違うものの「何を教えるのか」ということは、大切である。補習校では、同じ教科書を使って、8割の授業時間で指導していることを考えると、「この単元は何時間で何を教えるのか」ということを常に意識して指導することは大切なことである。

(2) 自学力を身につけさせる授業

国語辞典を活用する力を身につけさせることは、言語指導を行う上で、必須事項である。保護者の教育的な要求は、大きい。言語を獲得していくことは、辞典の活用は不可欠なことであることをていねいに説明していきたい。

(3) デジタル教科書の活用

飛び入り授業では、デジタル教科書を活用した授業であり、補習校の教員にも支持された。「補習校でも、教材として、デジタル教科書の導入を希望したい」という要望が出された。

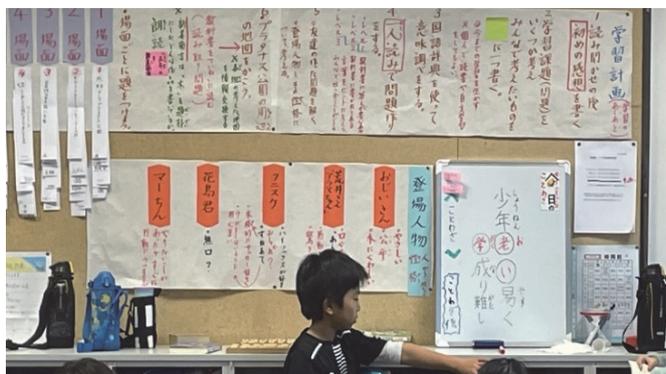


【資料2】 補習校4年生「短歌・俳句」飛び込み授業の様子

(4) 今後も間接指導を継続して行う

教室を補習校と共有しているので、掲示物にこだわるようになった。補習校のS教諭と5月の運動会に向け練習からいろいろなことを情報交換するようになった。本校と補習校との黒板メッセージは、子どもたち同士の交流に役立った。

【資料3】は、合同研修会後の教室の後ろの掲示物である。これは、「プラタナスの木」の学習の流れを掲示している。どのような学習をしていたのかわかるものである。私は、補習校が行われる前の



【資料3】 本校4年2組の「プラタナスの木」の学習のあしあと

日には、教室の後ろの黒板をできるだけ国語関係のものにしていった。これには、補習校の教員も「国語の授業での参考になります」と好評であった。また、「プラタナスの木」では、単元プリントにしたので、本校の子どもたちのものを後ろのロッカーの上に置き、補習校の子どもたちに手に取って自由に読んでもらうことにした。このよ

うに、本校と補習校の子どもたちの国語の授業を通じた交流を行った。

5. おわりに

海外の日本人学校に赴任して痛感したことは、研修の機会が非常に少ないことである。シニア派遣教員の強みは、今までの教職経験で身に付けたことを生かすことである。私は研修主任ではなかったが、可能な限り授業を公開し、目の前の子どもたちや教職員の育ちにつながるような研修を推進してきたつもりである。補習校との研修を主知的に取り組むことによって、本校の教職員を巻き込んだ研修につながっていくものであった。

先に述べたように、本校と補習校は校舎を同じにしている大変恵まれた環境にある。このような強みを生かすことによって、さらに教育効果や教職員の校内研修を推進していくことができる。これには、年度当初の目指す方向性の確認や、情報交換が大切なことは言うまでもない。

さらに、海外子女教育振興財団による「グローバル教師塾」令和4年度に受講し、隣学年を中心に研修したことを伝え合うことは、有意義なことであった。帰国した本年度も受講して、授業づくりを学んでいる。